青森県五所川原市方言の文末形式「デバ」について

田附　敏尚
神戸松蔭女子学院大学 言語科学研究所
tatsuki[at]shoin.ac.jp

On the Sentence Final Particle *deba* in the Goshogawara Dialect of Aomori Prefecture

TATSUKI Toshihisa
Kobe Shoin Women's University Institute for Linguistics Sciences

Abstract

本稿では青森県五所川原市方言の文末形式「デバ」について、種々の側面からの考察を行い、その結果、意味的特徴として以下のように結論付けた。

1) 対話における「デバ」の特徴：聞き手の持っている情報と話し手の情報に矛盾がある場合に、話し手の情報を聞き手にもあるはずのものとして提示し、情報を修正させる。
2) 独話における「デバ」の特徴：話し手の過去の情報と話し手が新規に獲得した情報に矛盾がある場合に、新規情報を導入し、情報を修正する

「デバ」には派生的な用法もあるが、これについても上記の特徴によって説明づけられる可能性を示した。また、命令形に接続する「デバ」についても、上記の特徴を援用することにより、説明づけられるという仮説を立てた。

This paper examines the use of the sentence final particle *deba* in Goshogawara dialect from a number of different angles. As a result, the following semantic features were clarified:

1) Semantic feature of *deba* in dialogue: When there is a conflict in information held by the listener and speaker, the speaker uses *deba* to correct the listener's information by presenting it as information that the listener should already have.

Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin, No. 19, 123–135, 2016.
神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇 No. 19, 123–135, 2016.

2) Semantic feature of deba in monologue: When there is a conflict between information that the speaker already possesses and information that the speaker has newly acquired, the speaker corrects his information by adopting the new information.

Although *deba* has a number of derivative uses, this paper suggests that these uses can be described by the above-mentioned features. Furthermore, this paper proposes that the use of *deba* following an imperative can also be described by applying the semantic features outlined above.

キーワード**:** 津軽地方、終助詞、ではないか、確認要求

Key Words: Tsugaru Region, Sentence Final Particle, *Dewanaika*, Confirmation Request

1. はじめに

青森県五所川原市では以下のように文末形式「デバ」が用いられる。

(1) [AとBは昨年の正月にハワイに行っていた]
A：去年の正月は何してたっけ？
B：ハワイに行ってたデバ

(2) [深夜に勉強している子に向かって]
A（親）：おっ、頑張っているデバ
B（子）：うん、明日試験があるから

(3) [箱にまだお菓子が残っていると思って開くとなかった。独り言で]
あら、空っぽだデバ

この「デバ」は、五所川原市では少なくとも筆者の世代では使用される形式であり、また高年層から筆者の世代までは使用される形式である。筆者はこれまで当該方言の文末形式を記述してきたが、それらの文末形式がそうであったように、この「デバ」についても詳しい記述はなされていない。そこで、本稿ではこの「デバ」についての記述を五所川原市出身である筆者の内省によって行う。筆者の経歴は以下の通り。

38 歳男性。居住歴は 0 歳〜18 歳－青森県五所川原市、18 歳〜24 歳－神奈川県川崎市、24 歳〜35 歳－宮城県仙台市、35 歳〜現在－兵庫県神戸市。両親の出身地は父が青森県五所川原市、母が青森県北津軽郡中里町（現：中泊町）。

2. 先行研究

ここでは、「デバ」についての先行研究をみていく。対象は五所川原市に限らず周辺地域も含むこととする。

まず、松木（1982）は弘前市の語彙を集めたものだが、ここでは、

でば（終助）だよ。だね。じゃないか。
強く念を押して言う場合（だよ、だね）と、軽く反語的に言う場合（じゃないか）とがある。（p.297）

として、「ユギァ　フテキタデバ。ドウリデ　サムエドモタンダ。（雪が降ってきたよ。なるほど寒いと思ったんだ。）」、「ソヘバ　カミァサゲルデバ。ヤメデ　ベジネヤレヘンガ。（そうすると紙が裂けてしまうじゃないか。止めて別にやれよ。）」などの例を挙げている。この記述自体は間違ってはいないが、しかし、例えば強く念を押して言う場合はどのような場合でも「デバ」が使われるかというとそうではない。一例を示すと、「早く行くんだよ」と強く念を押して言うときに「*早く行くんだデバ」とは言えない。この点で、これは記述が足りない面がある。

藤原（1986）は全国の文末形式（文末詞）を扱ったものであるが、この中にも「デバ」が見える。藤原は「デバ」を「と言えば」に由来する「テバ」の項に挙げ、以下のように記述している。

青森県下の東西にも「テバ」が見られる。
○ソッタラニ〔ï〕ス〔ü〕ル〔ü〕ナデバー。
そんなにするなってば。（叱る時）

は、県東、野辺地町での一例であり、
○シ〔ï〕ロシ〔ï〕マダ　デバ。コノフ〔ü〕ト。
広島だそうだよ。この人は。（初老の男性が、車中で、私のことを、その周囲の人々に言う。）

は、津軽半島での一例である。「テバ」には、「と言えば」というほどでもない、いわば、中身のゆるいものもあるのか。
○ホンドニ〔ï〕イネンダ　デバ。
ほんとにいないんだってば。

は、弘前市内での、つよい「テバ」の一例である。県下に「デバ」のよくおこなわれる中で、「デバナ」の言いかたもおこなわれている。（pp.207-208）

「デバ」が「てば」由来である可能性は考えられるが、藤原が述べているように「てば」と同じ意味としては記述できないため、ここから「デバ」がどのようなものであるのかを読み取るのは困難である。

佐々木（1988）は、青森市の文末詞を記述したものである。この中で「デバ」は以下のように述べられている。

⑨〈反論〉デバ、ドナ

これらは相手に詰問したり反論したり押しつけたりする、強気をもって発する際に使う語である。「デバ」は主に旧青森市部で使うが、「ドナ」は青森市南方に位置する農業地域（深沢（フカザワ）と称する）で使われ、これら二語の使用は共存することがない。

「デバ、ドナ」は終止形に下接する場合、相手に詰問・反論・問いただしの意味をもち、この点で共通語の「ではないか。じゃないか」と同じである。

シタハンデ　書ぐデバ（だから書くじゃないか）
ヤレバ　エドナ（やればいいじゃないか）

しかし、「デバ」は同じ意味で命令形にも下接する。

起ギロデバ（起きろといってるじゃないか）

「デバ、ドナ」は常に文末第一語となり下待遇である。（pp.679-680）

ここでは、接続に関する情報も述べられていることが特徴として挙げられる。しかし、これは後述するが、筆者の内省では命令形に「デバ」が接続することはなく、その点で地域差または世代差があることが考えられる。

松丸（2004）は、五所川原市に隣接する青森県弘前市の確認要求表現について記述したものである。この中で形式としては「デバ」が取り上げられているが、「デバ」は老年層が使用する形式（かつ男性的）とされている。そして、松丸（2004）におけるインフォーマントが若年層であるため、「デバ」自体の詳細な記述はなされていない。

このように、五所川原市方言の「デバ」に関しては、詳細な記述がなされていない現状にある。そこで、本稿では次節で統語的特徴や韻律的特徴を押さえたのち、4 節でその意味的特徴に迫っていきたい。以下、例文は見やすさを考慮して、「デバ」とそれに関与的な部分（問題となる部分）だけをカタカナで示し、ほかは共通語で示すこととする。

3. 種々の特徴

3.1 統語的特徴

「デバ」は名詞（＋だ）(4)、動詞 (5)、形容詞 (6)、形容動詞 (7) の終止形につき、それ自体活用もしない（≒それ自体過去も否定もあらわさない）。いわゆる終助詞と見てよいだろう。先行研究では命令形（と禁止形）に接続する例があげられているが、内省ではこれらは適格性に欠ける (8)(9)。また、テ形、意志形にも接続しない (10)(11)。この点、地域差あるいは世代差があることが考えられるが、本稿では取り上げない。

(4)　これ、お前のホンダ（本だ）デバ《名詞文》

(5)　眼鏡ならそこにアル（ある）デバ《動詞文》

(6)　[料理を食べて] メ（旨い）デバ《形容詞文》

(7)　A：マーク・ザッカーバーグって誰？
　　B：知らないの？　ユーメーダ（有名だ）デバ《形容動詞文》

(8)　*オギロ（起きろ）デバ〔動詞・命令形〕

(9)　*ネルナ（寝るな）デバ〔動詞・禁止形〕

(10)　*オギデ（起きて）デバ〔動詞・テ形〕

(11)　*ネヨー（寝よう）デバ〔動詞・意志形〕

「デバ」の前の述語は過去や否定になり (12)(13)、受身の「レル（イル）」、使役の「セル（ヘル）」、自発の「サル」なども現れる (14)。また、いわゆるモダリティーの助動詞類の後ろにも「デバ」は接続できるが (15)、「ベ」には接続できない (16)。「デバ」の後ろには文末形式「ナ」「シ」「ノ」がつく (17)。

(12)　眼鏡ならさっきそこにあったデバ

(13)　これ、お前の本じゃないデバ

(14)　書かイルデバ／書かヘルデバ／書かサルデバ

(15)　行くガモシャネ（かもしれない）デバ／行くハズダ（はずだ）デバ／行くラシー（らしい）デバ／行くミテーダ（みたいだ）デバ／行くッテラ（そうだ）デバ　etc.

(16)　*行くベデバ

(17)　A：マーク・ザッカーバーグって誰？
　　B：知らないの？ 有名だデバ｛ナ／シ／ノ｝

3.2　韻律的特徴

「デバ」は有核の語につくときは低くつき、無核の語につくときは高くついて「バ」で下がる。

(18)　「デバ」と述語のアクセント

有核	無核
牡蠣だ デバ	柿だ デ バ
来る デバ	行く デ バ
濃い デバ	薄い デ バ
元気だ デバ	健康だ デ バ

また、「デバ」は上昇調（↑で示す）になることはなく、常に下降調（↓で示す）である。

(19)　これ、お前の本だ｛*デバ↑／デバ↓｝

4. 意味的特徴

1. の例で挙げたように、「デバ」は対話でも独話でも用いられる形式である。ここでは、まず対話での「デバ」の特徴について説明したのち、独話での「デバ」について見ていくこととする。

4.1 対話における「デバ」

結論から先に述べると、対話における「デバ」の特徴は以下のとおりである。

(20) 対話における「デバ」の特徴：
聞き手の持っている情報と話し手の情報に矛盾がある場合に、話し手の情報を聞き手にもあるはずのものとして提示し、情報を修正させる。

まずはこの説明をするために、典型的に「デバ」が用いられる例を示す。

(21) [AとBは高校生]
A：「水兵リーベ僕の船」[1] って何だっけ？
B：なんで覚えてないんだよ。元素記号の覚え方だデバ

(22) A（親）：最近勉強してないだろ。ちゃんと勉強しろよ
B（子）：してるデバ

(21) は、高校生のAが「水兵リーベ僕の船」が何であるか忘れていて、一方同じく高校生のBはそれが元素記号の覚え方であるという情報を有しているという状況である。Aの発話によって、Aには「水兵リーベ僕の船」がなんであるかの情報がない（忘れている）ことが露見し、ここでAとBの情報に矛盾があるとBによって判断される。Bは授業で習ったことであるから当然Aにもその情報はあるはずのものだと考えて、それが元素記号の覚え方だということを提示し、情報を修正させるのである。

(22) は、親子の会話である。この状況では、親は自分の子が最近勉強していないと考え発話しているものである。それに対して、子は自分が勉強していると思っていて、ここにおいて親と子の情報に矛盾が生じている。子は親の発言に対して、自分の姿を見ればわかるはずのことであると考えて、（勉強）していることを提示し、情報の修正を迫っている。

松木（1982）に「軽く反語的に言う」とあったり、また佐々木（1988）では「反論」として説明されたりしているように、この対話用法では非難のニュアンスを伴うことが多い。上記の2例とも、非難や反論といったニュアンスを伴っている。

ここで一点注意しておきたいのは、それぞれが持っている情報というのは、発話の命題内容だけでなく、文脈から読み取られるものだということである。(22) において、(22)

[1]元素記号を暗記するために作られた有名な語呂合わせ。「水（水素, H）兵（ヘリウム, He）リー（リチウム, Li）ベ（ベリリウム, Be）ぼ（ホウ素, B）く（炭素, C）の（窒素, N）（酸素, O）ふ（フッ素, F）ね（ネオン, Ne）」（原子番号 1〜10）

Aは「最近勉強してないだろ」という発言がなく、ちゃんと勉強しろよ」のみであっても、Bはこの発言から、〈Aが「自分（B）が勉強していない」と思っている〉という情報を得て、それに対して「デバ」を用いて発話することはあり得る。文脈上「自分（B）が勉強していない」とAが思っているという情報が得られれば、Aの発話がどのようなものであっても、Bは「デバ」を用いて反論することになる。

(22′)　[A（親）はB（子）が勉強しているとは思っていない]
　　A（親）：ちゃんと勉強しろよ／ちゃんと勉強してる？ ／…etc.
　　B（子）：してるデバ

さて、(20) で挙げた特徴について、次の 4 点に分けて以下で検証していくこととする。

(23)　①「聞き手の持っている情報と話し手の情報に矛盾があると判断された場合」
　　②「話し手の情報を（提示）」
　　③「聞き手にもあるはずのものとして提示」
　　④「情報を修正させる」

4.1.1　聞き手の情報と話し手の情報との矛盾

まずは (23) ①からであるが、これを検証するために、聞き手の情報と話し手の情報が矛盾しない場面を考えてみる。

(24)　[AとBは高校生]
　　A：「水兵リーベ僕の船」って元素記号の覚え方だよね
　　B：*そうだデバ

(25)　[A（親）がB（子）の勉強している姿を見て]
　　A（親）：うん、ちゃんと勉強してるね
　　B（子）：*してるデバ

(24) では、AもBも「水兵リーベ僕の船」というフレーズが元素記号の覚え方だということがわかっている状況、つまり聞き手にも話し手にも同じ情報があるという状況であり、その中でAが当該の命題について確認している。(25) では親も子も「ちゃんと勉強している」という認識を持っている。この時、やはりどちらともBのように「デバ」を用いて返答することは不自然に感じられる。

4.1.2　話し手情報の提示

次に (23) ②であるが、これは、提示する情報は、話し手の知識や認識であるということである。他にも例えば (26) のように話し手の評価・判断なども提示しうる。

(26) [Aがめずらしく暖色系の服を着てきた]
A：私、暖色系って似合わないんだよね
B：そんなことないって。似合ってるデバ

本稿の最初にあげた (1) B「ハワイに行ってた」は話し手の認識・聞き手の認識のどちらでも解釈可能であるが、これを (27) のようにパラフレーズし、命題を聞き手の認識にすると、「デバ」を用いた文としては不適格となる[2]。このことから、やはり「デバ」で提示するものは話し手の情報（知識・認識・評価・判断…）であると考えられる。

(27) [AとBは昨年の正月にハワイに行っていた]
A：去年の正月は何してたっけ？
B：*ハワイに行ってたのを覚えているデバ

4.1.3 聞き手にもあるはずのものであるか否か

(23) ③は、逆に聞き手にはないはずのものを尋ねられる場面で「デバ」は使われるかどうかを確認することによって検証できる。(28)(29) の例がそれである。

(28) [Aは幼稚園児、Bは高校生]
A：「水兵リーベ僕の船」って何？
B：*元素記号の覚え方だデバ

(29) A（親）：勉強の調子はどうだい？
B（子）：*うん、ちゃんとやってるデバ

(28) においてAは小学校にもまだ入っていない児童であり、一般的には「水兵リーベ僕の船」がなんたるかを知らない年齢である。そのような状況、つまり話し手Bの持っている「それが元素記号の覚え方だ」という情報が聞き手Aにはないはずであるという状況では、(28) Bのように「デバ」を用いて話し手の情報を提示することはできない。(29) も同様であり、親であるAの発言からしても、親には子の勉強の調子がはかどっているのかどうかという情報がない状況である。このような状況で「デバ」を用いると、やはり (29) Bのように不適格となる。

また、話し手と聞き手の眼前にある情報を聞き手にもあるはずのものとして提示できるかという点についても考えたい。

[2]「デバ」だけで考えるとこれは当たり前に映るかもしれないが、「デバ」と同じようにいわゆる確認要求を表す「ベ」は (27′) Bのようにこれでも適格となる。

(27′) B：ハワイに行ってたのを覚えているベ↑

なお、この内容については宮崎 (2005) を参考にしている。

(30)　??ほら、そこに赤い屋根の家があるデバ。そこの角を右に曲がって……

(30) は二人の眼前の情報を描写しているものであり、この情報自体は話し手も聞き手もアクセスできる。しかし、「デバ」はその場においてアクセス可能というだけでは使用できない。この状況では聞き手にはまだ情報がないと見做されるわけである。(31) のように一度注意を促した後であれば、聞き手にあるはずの情報（あるいはあるべき情報のほうが正確か）として扱うことが出来、「デバ」が用いられる。

(31)　A：ほら、そこに赤い屋根の家があるでしょ。そこの角を右に曲がって……
　　B：どこ？
　　A：え、わからないの？ すぐそこにあるデバ

4.1.4　情報を修正させる

最後に (23) ④についてであるが、これは単純に情報を伝達するのみなのか、修正させるのかという点が問題となる。これは、非難のニュアンスと関連が深く、単に伝達するのみの場合は非難のニュアンスがなく、逆に非難のニュアンスがあることから修正させるという力を持つものと考える。

単純に伝達する例は、先に挙げた (28)(29) のような例であり、これらは聞き手にそもそもないはずの情報であるから、非難のしようがなく、単純に伝達するのみとなっていると考えられるが、先に述べたとおりこれらは不適格である。また、聞き手にあるはずの情報を提示している場合でも、(32) のように非難のニュアンスを除くと単に伝達するのみの文章となり、これも不適格である。

(32)　[A と B は高校生]

　　A：. 「水兵リーベ僕の船」って何だっけ？
　　B：*あれ、忘れちゃったの？ まあ、覚えることも多いから仕方ないよね。それ、元素記号の覚え方だデバ

4.2　独話における「デバ」

以上、対話における「デバ」の特徴をあげ、検証してきた。結果、(20) に挙げた特徴は、検証にも耐え得るものだと判断される。(20) をここに再掲する。

(20)　対話における「デバ」の特徴：
　　聞き手の持っている情報と話し手の情報に矛盾がある場合に、話し手の情報を聞き手にもあるはずのものとして提示し、情報を修正させる。

一方で、「デバ」は独話においても用いられるものである。独話における「デバ」の例をいくつか以下に示す。

(3) [箱にまだお菓子が残っていると思って開くとなかった。独り言で]
あら、空っぽだデバ

(33) [九州は暖かいと聞いていたのに実際来てみると思いの他気温が低い。独り言で]
わっ、寒いデバ

(34) [あまり評判のよくないラーメン屋にて、独り言で]
旨いデバ

(35) [友人がUSBメモリがないと騒いでいたが、後で研究室に来てみるとテーブルの上にあった]
あいつどこを探してたんだろう、こんなにわかりやすいところにあるデバ

これら独話の例は、発見や新規情報の獲得といった例であり、驚きのニュアンスを伴うのが通常である。これらが対話の例とまったく関係がないかというと、そうではない。対話では聞き手の持っている情報と話し手の情報に矛盾がある場合が問題となっていたが、独話では、それぞれ、(3)「箱にまだお菓子が残っている」、(33)「九州は暖かいと聞いていた」、(34)「ラーメン屋の評判がよくない（ここのラーメンはまずい）」、(35)「USBメモリがない」という話し手の過去の情報と話し手の新規の情報（認識）に矛盾がある場合と考えることが出来る。つまり、対話では聞き手であった相手が、独話においては過去の自分自身であると捉えると、その特徴も対話のそれと並行的に考えることが出来るのである。やはり、対話と同様、矛盾がない場合は「デバ」は使いにくくなり、独話なので当然話し手の情報（認識）が問題となる。

(36) [評判のいいラーメン屋にて、独り言で]
?旨いデバ

ここで、独話における「デバ」の特徴を示す。一点、対話の「デバ」にあった「聞き手にもあるはずのものとして提示」というものは消え去る（「話し手の過去の情報にもあるはずのものとして」とはならない）が、これがなぜなのかは今後の課題とする。

(37) 独話における「デバ」の特徴
話し手の過去の情報と話し手が新規に獲得した情報に矛盾がある場合に、新規情報を導入し、情報を修正する

4.3 対話における派生的な「デバ」

さて、「デバ」には、実は次のような例が存在する。

(38)　[Aがめずらしく暖色系の服を着てきた]
　　A：どう？　この服似合うでしょ
　　B：うん、よく似合ってるデバ

このような例では、Aの情報とBの情報にあまり差があるようには見られない。しかし、ここでの「デバ」は適格である。これをどう考えたらよいだろうか。

これは、聞き手との情報の矛盾はなくとも、想像以上だと示すことによって—すなわち話し手の想像と現実との矛盾がある体を装うことによって— 驚きを表しているのではないかと考えられる。

ここで重要なことは、対話ではあるものの、独話的に自分の想像（自分の過去の情報）との矛盾を表明することもあるのではないか、ということである。そういう点では、この例は対話と独話の狭間にある例のように見受けられる。

また、次のような例も適格である。

(39)　[同窓会で、芸能界で活躍している友人Bにあった]
　　A：久しぶり。随分活躍してるデバ
　　B：うん、ここのところ実家に帰る暇もなかったよ。

この例では、Aは会話の初発において「デバ」を用いており、かつ、話題がB自身のことである点が特徴的である。この状況では、聞き手の情報（この場合は聞き手の判断）と話し手の情報（判断）に矛盾が生じているかはわからず、むしろ聞き手のほうがより確かな情報（判断）を持っていると考えてしかるべきである。この例はどのように考えられるだろうか。

解釈の可能性は2通りある。一つは、上述の(38)のように、話し手の想像と現実との間に矛盾がある体を装っているという解釈である。この場合は、実際に驚いたのは発話時点ではないが、以前の驚きを再現するかたちで、Bに伝えていると考えられる。

もう一つの解釈は、以下のとおりである。

繰り返しになるが、「デバ」は話し手の持っている情報を聞き手にもあるはずのものとして提示し、情報を修正させるものであった。その時、修正すべき情報さえも明らかに聞き手にはないと判断される場合は、「デバ」は用いられない（(28)(29)を参照）。また、聞き手にも話し手にも情報はあるが、明らかに両者間に情報の矛盾がない場合も、「デバ」は用いられない（(24)(25)を参照）。(39)は、このどちらでもないことは確認しておきたい。つまり、聞き手であるB自身の情報なので、聞き手に情報がないとは考えにくく、また、Bが活躍しているという判断は否定される可能性を残しており、両者間の情報に矛盾がないとも言えないのである。

(39) Aは、このような状況の中で、話し手の判断と聞き手の判断との間に矛盾がある体を装って提示しているという解釈も成り立つと考えられる。あるいは、その特徴に違反しない範囲で逸脱させて用いられているということもできよう。

いずれにせよ、(38)にしても(39)にしても、これらは(23)「聞き手の持っている情報と話し手の情報に矛盾があると判断された場合」という点において、矛盾がある体を装

う、あるいはその特徴から逸脱させるという方略で、「デバ」自体の特徴からすれば派生的な用いられ方がされていると説明づけることができるのである。

4.4 命令形に接続する「デバ」

先行研究において、「デバ」は命令形にも接続するとの記述があった。先にも述べたように、これは筆者の内省では不適格なので、今回は対象としなかったが、本稿の対話における「デバ」の特徴が正しいとすれば、その関係性は簡単に見えてくる。

対話における「デバ」の特徴は、話し手の情報、聞き手の情報が問題となっていて、その情報とは具体的には話し手・聞き手の知識や認識だったが、命令形に接続する場面においては、これが知識や認識ではなく、話し手の意志や聞き手の意志（行動）だと考えられるのである（聞き手の意志は話し手には具体的にはわからないため、話し手は聞き手の行動から予測するしかない）。

(40) 命令における「デバ」の特徴（仮説）：
聞き手の持っている意志（行動）と話し手の意志に矛盾がある場合に、話し手の意志を提示し、意志（行動）を修正させる。

例としては、次のようなものであろう。

(41) [息子が遊んでばかりいるように見えるので、息子に向かって]
ちゃんと勉強しろデバ

(41) では聞き手である息子の意志（行動：遊んでばかりいる）と、話し手の意志（ちゃんと勉強すべし）との間に矛盾があるため、話し手の意志を提示し、聞き手（息子）の意志（行動）を修正させているものと考えられるのである。

これはまだ仮説の域を出ないが、今後実際命令形＋「デバ」を調査することによって、この説を検証したい。

5. おわりに

本稿では青森県五所川原市方言の文末形式「デバ」についての考察を行った。結果は以下のとおりである。

(20) 対話における「デバ」の特徴：
聞き手の持っている情報と話し手の情報に矛盾がある場合に、話し手の情報を聞き手にもあるはずのものとして提示し、情報を修正させる。

また、上記 (20) の特徴からは逸脱した対話における「デバ」の用法があるが、これについても (20) や (37) の特徴から説明づけられる可能性を示した。

そして、(20) を援用して、先行研究における命令形に接続する「デバ」の特徴も仮説として立てた。

(40)　命令における「デバ」の特徴（仮説）：
聞き手の持っている意志（行動）と話し手の意志に矛盾がある場合に、話し手の意志を提示し、意志（行動）を修正させる。

「デバ」という形式は、実は青森県のみならず、秋田県、岩手県、宮城県北部、山形県庄内地方にまで広がっている形式であるが、それぞれ接続も用法も異なっているようである。今後は五所川原市方言の「デバ」の記述の精度をあげていくとともに、各地方言における「デバ」はどのような特徴をもっているのか、その点についても調査・分析を進めていきたい。

参考文献

安達太郎（1999）『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版

佐々木隆次（1988）「青森市方言文末詞の考察」此島正年博士喜寿記念論文集刊行会編『此島正年博士喜寿記念　国語語彙語法論叢』桜楓社

田野村忠温（1988）「否定疑問文小考」『国語学』152, 国語学会

蓮沼昭子（1995）「対話における確認行為－「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法－」仁田義雄編『複文の研究（下）』くろしお出版

藤原与一（1986）『方言文末詞〈文末助詞〉の研究（下）』春陽堂書店

松木明（1982）『弘前語彙』弘前語彙刊行会

松丸真大（2004）「青森県弘前市方言の確認要求表現」『阪大社会言語学研究ノート』6, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

三宅知宏（1996）「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89, 日本語教育学会

————（2011）『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版

宮崎和人（2000）「確認要求表現の体系性」『日本語教育』106, 日本語教育学会

————（2005）『現代日本語の疑問表現　疑いと確認要求』ひつじ書房

Author's web site:　`http://www.shoin.ac.jp/`

（受付日: 2016 年 1 月 10 日）